

<16-2 地区の調査>

調査の概要 16-2 地区は J R 北陸線の東側、城ノ橋通りの北に位置します。城下絵図（松平文庫）によると、調査区南端には東西に延びる堀があり、その北側に石垣と土居（土手状の防衛施設）、さらに北には武家屋敷地がありました。調査区は近世を通じて一つの屋敷地内に納まっていますが、住人は 17 世紀初頭には結城晴朝（初代福井藩主結城秀康の養父）、17 世紀中葉から 18 世紀は西尾氏、19 世紀は永見氏と複数回入れ替わっています。また、平成 12・13 年度に西側隣接地を調査した際には、16 世紀後葉の北庄城関連の遺構が残っており、今回もその発見が期待されました。

遺 構 近世の遺構は、寛文 9 年（1669）の大火を境に大きく 2 時期に分けられます。大火後の遺構には溝・土坑・井戸・上水施設等があります。井戸は 4 基あり、全て桶状の井戸枿を持つものです。うち 2 つは、底板の穴から竹管が地下深く延び、水圧により地下水が噴き上がる自噴式井戸でした。一方の井戸からは竹を用いた上水管が延び、くみ上げ用の井戸 1 基につながっていました。上水管は途中の枿で枝分かれし調査区外にも延びていました。通常の井戸は 1 基で、桶状の井戸枿を 3 段以上重ねたものでした。福井地震の影響で、2 段目より上が大きく南に傾いていました。

大火前の遺構には礎石建物（柱の根元に石を据えた建物）・掘立柱建物（柱の根元を地面に埋めた建物）・柱列・溝・土坑等があります。礎石建物は一棟で、東西・南北 6 間以上の規模があります。残っていた礎石は 3 つでしたが、礎石を抜き取った跡を 20 基確認しました。掘立柱建物は一棟で、東西 1 間、南北 2 間の規模がありました。その他に、柱を建てた跡が並ぶ柱列が 9 列ありました。塀や柵、建物の一部になると考えています。これらの建物が建つ整地土は特に硬く締まり、叩き締め跡と想定できる浅い凹凸が多数ありました。調査区中央には、幅 1.5m、深さ 1.0m 以上の大溝がコの字状に巡っていて、屋敷地内を区画する溝であったと考えています。また、この一部を壊して大型の廃棄土坑（ゴミ穴）が作られていました。

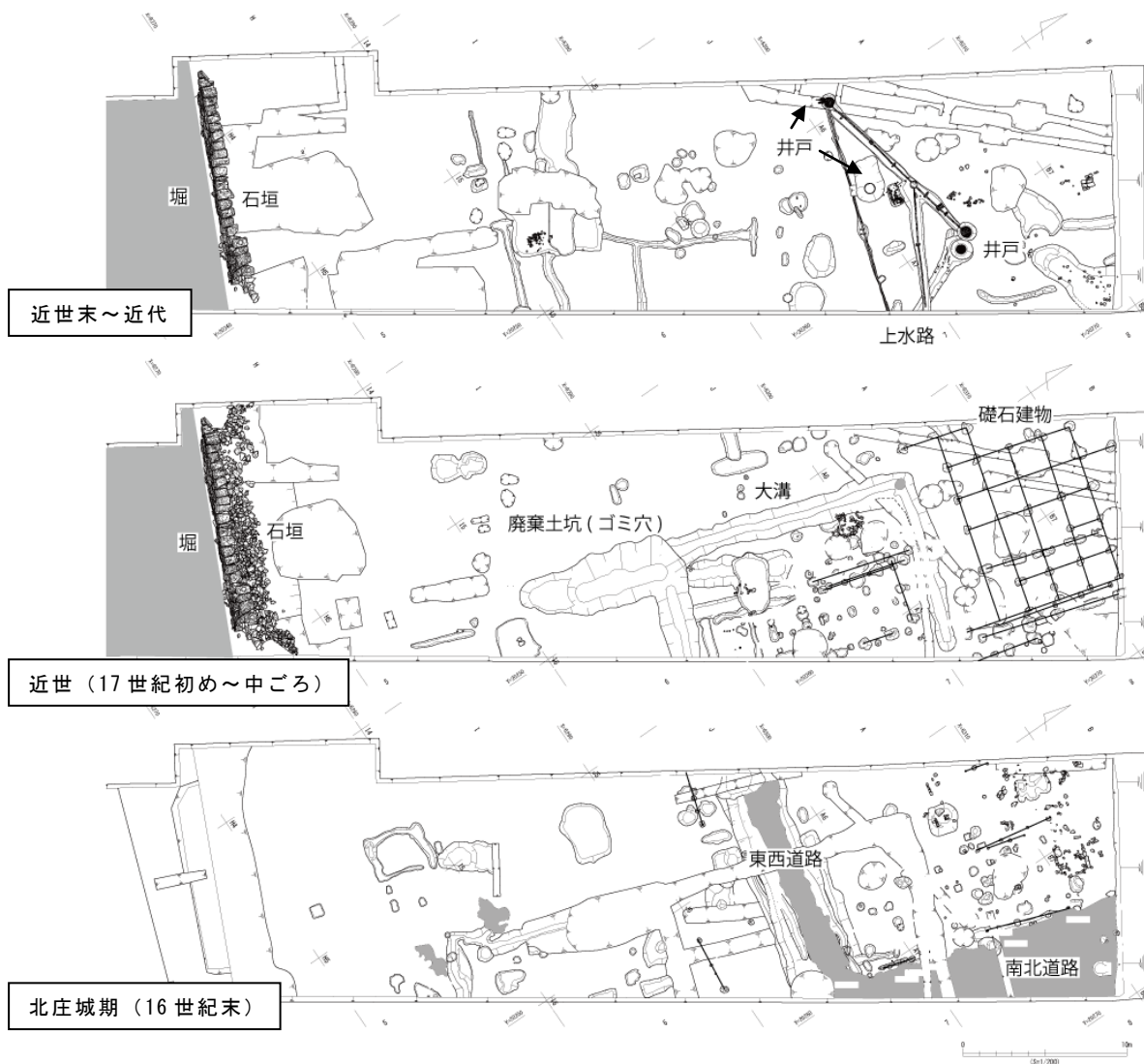
石垣は最大で 6 段分が残り、大部分は近世初めの築造後、大きな改修が行われることなく近代に至ったと考えています。石材は全て笏谷石（足羽山で産出する凝灰岩）です。根石（石垣の一番下の石）の下には割石が敷かれ、一部に胴木（石垣が自重で沈むことを防ぐ木組み）とそれに直行して組んだ跳木、さらにそれらを固定する杭が残っていました。跳木は裏込石（水はけを考え石垣と盛り土との間に入れた石）の下まで伸び、最大で 2.0m 程の長さがありました。石垣の築石は 2 段目から上が最大 30 cm ほど堀側にせり出している他、東端部が一部積み直されていました。この石垣は戦後まで埋められずに露出していたため、福井地震の影響で、このようにずれたものと考えています。また、土居の痕跡は近代の削平により確認できませんでした。

中世の遺構は、大部分が柴田勝家築城の北庄城に伴うものです。道路・柱列・溝・石列・土坑などがありました。道路は調査区北半部にあり、南北・東西方向のものが L 字状につながっていました。南北道路は幅 5.0m 以上、東西道路は幅 2.5m 前後ありました。上面には硬く締まった砂層が露出していましたが、本来は砂利敷きの路面で覆われており、近世初めの福井城造成工事の際に削られたものと考えています。南

北道路の断面では、砂層の下に砂利敷き面や側溝がいくつも重なっていることが確認でき、最大で3回かさ上げや補修工事が行われたと考えています。柱列は7列ありましたが、明確な建物跡は確認できませんでした。

遺物 出土遺物で多くを占めるのは近世の肥前産陶磁器や越前焼、カワラケ（土師質皿）です。とくに、近世初めから寛文大火ころの遺構や整地土中には、カワラケが集中して出土する地点がいくつもありました。その他に、石製品・木製品・金属製品等、さらに中世の陶磁器や古代の土器（須恵器・土師器）も出土しています。

まとめ これまでの福井城跡の調査では、建物跡の一部しか確認できないことがほとんどでした。それは礎石建物が多く、建て直し等で礎石を外すと、痕跡が残りにくいためです。今回は、当時の遺構面が削られることなく、盛り土によって保護されていたため、幸運にも建物のかなりの部分を確認することができました。この建物は、福井藩初代藩主の養父である結城晴朝の屋敷の可能性があり、今後の出土遺物の整理作業の中で、明らかにしていこうと考えています。（中原義史）



調査区全体図（縮尺：1/400）



礎石建物(白)・掘立柱列(黒)・井戸(黒丸)(東から)



井戸(東から)



北庄城期の東西道路と側溝(西から)



大溝(南から)



石垣(根石未検出時点・南から)



胴木・跳木等(東から)

<16-6 地区の調査>

調査の概要 16-6 地区は 16-2 地区の北側につながります。城下絵図（松平文庫）によると、17 世紀初頭には調査区全体が結城秀康の養父結城晴朝の屋敷地に入っています。その後、17 世紀第 2 四半期に北端部が分割されて、16-3 地区と同じ屋敷地になります。さらに幕末には、16-2 地区とともに調練場の敷地となり、建物等が撤去されました。

遺構 調査区北端には東西方向の溝があります。寛文の大火前から溝として機能していましたが、大火後に規模を拡大して屋敷境の溝として利用され、幕末には調練場造成のために埋められました。区画溝の最大時の幅は 3 m、深さ 1.5 m でした。

中世の遺構としては、16-2 地区から続く南北道路のほか、その両側に柱痕の残るピットを確認していますが、建物の規模等は不明です。幅 1 m 弱で、端を笏谷石で揃えその中に笏谷石を敷き詰めた建物の土台も検出しました。この土台は南北道路の下層へ延びており、北庄城よりも古い時期のものと考えられます。

遺物 文字が書かれたカワラケ（土師質土器皿）がまとまって出土しました。
（青木隆佳）



溝 166-21・36（西から）



溝 166-22 遺物出土状況（南から）



調査区全景（南から）



礎石列（南から）

<16-3 地区の調査>

調査の概要 16-3 地区は、福井城下の中之馬場と呼ばれる曲輪にあった3つの東西道路のうち最も南の道路と、その南側の武家屋敷地にかかる位置になります。調査区内の北端で砂利敷道路を確認しており、その南はひとつの屋敷地内に納まっています。

城下絵図と比較対照すると、調査区にかかる屋敷地は、築城当初の17世紀初頭には藩祖結城秀康の養父、結城晴朝の屋敷の一部でしたが、17世紀第2四半期頃には分割されて与力衆の屋敷地としてあてがわれました。17世紀第3四半期以降は個人の武家屋敷地として利用されるようになり、幕末の文久3年(1863)に調練場に組み込まれるまで存続しました。屋敷地の居住者は、結城氏→西尾氏与力→堀氏→(18世紀不詳)→彦坂氏→渥美氏→丹羽氏と変遷しています。

遺構 今回の調査では、砂利敷道路のほか、井戸、水道設備である竹樋、廃棄土坑、石組水路などを確認しました。また、礎石列や柱根の残る柱穴列など建物に関わるとみられる遺構も確認しましたが、近代以降の鉄道施設工事による破壊を受けており、建物配置などは不明瞭となっていました。

砂利敷道路は、かさ上げしつつ何度も補修されており、4面分の砂利敷路面を確認できました。道路の両側には土塀の基礎とみられる笏谷石を詰めた溝や、等間隔に並ぶ土坑などを検出しました。とくに道路の南側には、平行にのびる複数の溝が重複して掘られており、これらも塀の基礎など区画施設の痕跡と考えられます。そのため、南側屋敷地の区画施設は、板塀や土塀などと変化しながら何度も改修されたようです。

道路下層の路盤は、最下層を炭化物や焼土粒を含む暗褐色粘土で平らに造成し、その上に約10cmずつの厚みで細砂・粗砂・粗砂の順に叩き締めつつ、かさ上げしています。この上に径4cm前後の砂利を敷き、さらに径5~15cmの砂利を敷いて路面としています。最下層の暗褐色粘土層の上面には、造成時に叩き締めた痕跡とみられる工具痕(直径15cm前後のくぼみ)が広範囲に確認されており、丁寧に施工された状況がうかがえます。

井戸は、石組井戸(163-15・493・512)、桶側井戸(163-2・85・250・451)、素掘り井戸(163-247・522)、板組井戸(163-293・439)、瓦積み井戸(163-258)などを確認しました。

石組井戸は、おもに不ぞろいな笏谷石の割石を丁寧に積み上げたものです。このうち163-512は、大ぶりの石材を使用しており、石材の井戸内側となる面を平らに仕上げています。

桶側井戸は、底面付近に桶が残存したもの(163-85)や、桶を2~3段に積み重ねた状態で検出したもの(163-2・250・451)などがあります。桶側は十数枚の板からなるもので、板は幅が10~20cmですが、長さは約60cmと約120cmのものでした。

板組井戸は、板で四角く囲った内側を栈木や杭で固定するもので、四隅に板材と杭が残存するもの(163-293)と、柄で四角く固定した栈木と板材が残存するもの(163-439)がありました。どちらも板材はほとんど残存していません。

瓦積み井戸は、福井城下では初めての検出です。主に平瓦・軒平瓦を平らに積み重ねており、これらの裏には丸瓦なども詰められていました。いずれも燻瓦（いぶし瓦）です。ただし、瓦だけで構成されるのではなく、最下段に桶側を据えて、その周りに瓦を積み上げており、瓦の間には笏谷石の割石や石瓦も含まれていました。なお、これまでの調査により、付近は福井地震の影響によって標高 4.5m 付近から上層が南へ最大 1 m 以上横ずれして移動したことが知られており、今回確認した井戸についても同様に上下で食い違いが認められました。

水道設備である竹樋は、攪乱に寸断されながらも、東西方向に直線的にのびており、調査区を横断してさらに両側へ続いています（163-22～25）。竹樋の残存状態は良好とは言えませんが、節をきれいに抜いた様子が確認できました。寸断された竹樋の他に、径約 4 cm の孔をあけた長さ約 40 cm、太さ約 15 cm 角の木材を検出しています。この角材は、孔の位置が残存する竹樋の延長上となるように据えられていたことから、竹樋の継手とされたものと考えられます。なお、竹樋はわずかに東から西へ傾斜しています。

廃棄土坑は生活ごみを埋めた土坑であり、俗に「ごみ穴」と呼ばれています。十数基確認しましたが、多くが調査区の東側にまとまっており、長径 3～5 m の大型のものがいくつも重複するように掘られています。過去の調査により調査区の東に接する現在の道路は、江戸時代の道路と一部が重複することが確認されていますので、調査区東端は屋敷地の東端付近となるようです。そのため、敷地内東端を生活ごみの処分場所としていたことが窺えます。

廃棄土坑からは、土器・陶磁器の破片、箸・楊枝や下駄などの木製品、刀装具の切羽・文房具の水注・嗜好品の煙管などの金属製品、破損した石瓦やバンドコなどの石製品、様々な植物の種やへた、貝殻（巻貝・二枚貝）、魚骨・獣骨、炭化穀類など、多種多様な遺物（生活ごみ）が出土しました。なお、多くの廃絶した井戸は、石組や桶側などの内部構造を解体・除去して、廃棄土坑として利用されていました。

石組水路（163-240）は、調査区を横断して東西方向に直線的にのびていましたが、調査区の中央から東側にかけて廃棄土坑などにより破壊されていました。屋敷地北側の砂利敷道路と平行してのびており、屋敷地内の建物あるいは区画に伴うことが考えられます。なお、この水路は、井戸（163-451）を造るために掘った穴を埋めた後に造られており、さらにその井戸の穴は 16 世紀にさかのぼるとみられる石組の溜枿（163-491）を壊して掘られていました。

これらのほか、調査区南側には比較的広範囲にわたる砂利敷（163-98）や扁平な割石を敷き並べた部分、石列（163-120・147・148）などが、同一地点で重なって検出されています。これらは庭の一部として整備されたものの痕跡と考えられますが、検出した状況から比較的短期間のうちに何度も造りかえられたことがうかがえます。17 世紀の半ば頃の比較的短期間のうちに屋敷地の分割や住人の異動などがあったようであり、それらに起因する屋敷地内の改変・修築の痕跡と捉えることができます。

（御嶽貞義）



調査区全景（最終面・北東から）



建物礎石（？）検出状況（東から）



石組井戸 163 - 512 検出状況（南から）



井戸 163 - 2 調査状況（西から）



瓦積み井戸 163-258 確認時の状況（北から）



瓦積み井戸 163-258 検出状況（南から）



廃棄土坑 163-194 下駄出土状況（西から）



砂利敷道路と土塀基礎の検出状況（東から）